

場(ば)あ

ここを行きかう人たちのパラパラシンケン物語

2026.10月　第11号

特集　アルコール医療の連携

「アルコール依存症治療専門病棟の紹介」　生活支援科長 今岡　岳史

「トリートメントギャップについて」　医局長 大浦　邦康

「お酒の困りごとチーム」について

病棟での関わり紹介

着任医師紹介 / いわくらオープンフェスタ開催決定！ / ココル開設！

「場ぁ」という言葉は、ここを行きかう心を病める方たち、ご家族、地域の方々、職員にとって、人が生きていくのに必要なさまざまな繋がりが生まれるところというニュアンスを含んでいます。私たちの思い描く精神医療は、綺麗事ではなく、人間臭く、人と人が出会い、心を病める方の困難と向き合うことです。ここで生まれるたくさんの物語。私たちはこの地が、常に未来へと繋がる開かれた扉を持つ「場ぁ」であり続けることを願い、この情報誌を「場ぁ」と命名しています。

※いわくら病院は伝統的に開放医療を理念に掲げ、入院されている方々の個性を尊重する治療を目指しています。

医療法人稲門会
いわくら病院

ホームページ　インスタグラム

特集

アルコール医療の連携

アルコール依存症の患者様は専門医療につながる前に、まずは地域の一般病院やクリニックを受診されることが多いです。そして、そこから専門医療につながるまでにはさらに数年の年月を要するといわれています。今回は、一般病院や地域のクリニックとアルコール専門医療との連携について、トリートメントギャップ低減に向けての取り組みを紹介いたします。

「アルコール依存症治療専門病棟の紹介」

アルコール依存症専門治療病棟専従医師
兼生活支援科長　今岡　岳史

当病棟は京都府内で唯一のアルコール依存症治療専門病棟です。42床の精神科急性期病棟（開放病棟）です。3名の医師と1名の精神保健福祉士が病棟専属で配属されており手厚いマンパワー体制となっています。入院期間は個々人のご都合に配慮し最短で1週間から最長で3ヶ月まで相談に応じています。病棟の看護詰所は自由に出入りでき、家庭の居間のような雰囲気になっています。患者さんから「思っていたのと違いました」「気軽に話をできて良かったです」「合宿の様ですね」と言われる事が多いです。人とのつながりを取り戻し心に余裕を持って、改めて課題と向き合えるような雰囲気づくりを心掛けています。

アルコール依存症は肝硬変症、循環器疾患、糖尿病をはじめとする身体合併症を伴うことが多いです。当院は精神科専門病院です。そのため身体的な治療には限界があります。身体状態が重篤な方については一旦、総合病院に転院し身体的治療が改善したのちに当院で引き続き入院治療を行っています。普段より京都府内の総合病院、診療所と定期的にオンライン会議を開催し連携の強化を図っています。依然として依存症の専門治療を受けている方は少数ですので、各医療機関と協力し、できるだけ早い段階で多くの方が専門加療を受けることができるよう努めています。

入院患者さんの半数以上が感情障害、神経発達症、社交不安障害、ＰＴＳＤ

「トリートメントギャップについて」

アルコール依存症専門治療病棟専従医師
兼医局長　大浦　邦康



アルコール依存症は自分で飲酒を止められなくなる病気です。さらに酒のために現実検討が歪むので患者さんは酒が問題と認識できず、飲酒を止めないことが多いです。このため、アルコール依存症はしばしば「否認の病」と呼ばれます。そのため、治療の必要性のある方がなかなか治療につながりません。これをトリートメントギャップと言います。

統計的な数値を見るとそれは歴然としています。令和6年に久里浜医療セン

（心的外傷後ストレス障害）などの精神疾患を合併されています。不安感、対人緊張、睡眠障害を緩和する目的で飲酒が始まりかえって元々の病態を重症化させ、また依存症も併発することは珍しくありません。しかし、精神疾患の治療を適切に行う事で飲酒問題が大幅に減る可能性があります。日常生活や仕事の場面でどんな時にストレスを感じやすいか振り返ってもらうことも重要です。例えば「集団の中で過ごす事が苦手」「大勢の前で話すのが苦手」「予定の変更があると苛々する」などの悩みがある方の場合は、心理検査も参考にして精神疾患のどのような症状が困難につながっているのか把握し、原疾患へ薬物療法、精神療法を行います。また、そういった事態に直面する時に限定して不安感や神経の昂りを抑えるよう一時的に薬を使う事が有効な場合もあります。自身の傾向を素直に把握する事で日常ストレスが軽減されより良く社会参加できるようになり、結果、飲酒問題が減少する可能性があります。



病院のある「岩倉地区」は、市街地から離れ、自然環境に恵まれた静かな場所で、療養に適しています。私は、帰宅する際は毎日、岩倉川の川沿いを30分程度歩いています。歩いていると気持ちの昂りが自然と鎮静されるように感じられ思考をリセットする時間として楽しみにしていて無理なく続ける事ができています。夏季はお子さんと一緒に川遊びを楽しまれる患者さんもおられます。慌ただしい日常から離れ、緩やかな時の流れと自然の中で心身を整え新たな「船出」ができるようともに取り組んでいきたいと考えています。



ターが、全国の成人８０００人を対象に行った疫学調査では、アルコール依存症が疑われた人１１９名のうち、専門医療機関で治療を受けた人の割合は５名（4.2％）に過ぎませんでした。他の疾患と比較してみましょう。ＷＨＯの欧州圏における調査（２００４）によると、治療が必要なのに治療を受けていない人の割合は、統合失調症で18％、うつ病で45％であるのに対し、アルコール依存症では92％に上っています。

治療から脱落する患者さんを減らすため、当院も以前より患者さんの個人的事情に配慮した対応を心掛けています。当院に昔入院したことがあるＯＢさんからしばしば「随分規則が緩くなった」との声をいただきますが、ご理解をいただくようお願いしています。近年、アルコール依存症専門病院のスタッフが他の病院や相談機関に出張し相談にあたるといった試みも行われています。

こういった試みは、患者さんが自己を振り返り、断酒または減酒といった治療への意欲を引き出すことが目的です。そしてこれらの手法が実際に有効であるとの報告が出てきています。これらはすべてトリートメントギャップを減らすための試みであり、今後も患者さんが気軽に相談し頼っていただける病院を目指していきたいと考えております。

「お酒の困りごとチーム」について

アルコール関連問題への総合的・包括的・計画的な施策が日本国内でも少しずつではありますが前進していく潮流のなか2021年8月に京都市で発足した『お酒の困りごとチーム』は、現在、安東医院、いわくら病院、京都九条病院、京都南病院、京都民医連太子道診療所、京都民医連中央病院、西陣病院（五十音順）、これら依存症専門医療機関（病院、クリニック）・一般病院内科の多職種がその主な活動として定期的にオンラインミーティングでの臨床検討・討議を行い、普段から連携をしっかり図ることで、早期介入の促進などアルコール関連問題におけるトリートメントギャップを埋める取り組みを続けています。お酒の困りごとからの回復を共に目指すhybrid teamの大切なmembersである皆様（当事者、医療者を含む支援者）、今後とも宜しくお願い申し上げます。



敬意と感謝を込めて。
いわくら病院
アルコール依存症専門治療病棟
専従医師
金　俊佑

安東医院　医師

依存症の回復には、安心して過ごせる「場」が欠かせません。そしてその土台には、人と人が安心して繋がれる関係があります。私は安東医院で診療するとともに、週1回いわくら病院でも勤務しています。入院をためらう患者さんも、「私がいること」や「顔の見えるスタッフが待っていること」を知ると安心されることがあります。書面だけでは伝わらない思いや細かな情報も共有できるのは、大きな強みです。安東医院が地域の安全基地でありたいと願う私にとって、いわくら病院は心強い仲間です。これからも連携を深め、共に支えていきたいと思います。

京都民医連中央病院 医療ソーシャルワーカー

2021年より「お酒の困りごとチーム連携会議」が始まり、今では複数の専門医療機関や一般病院が参加しています。当院も多職種で参加させていただき、アルコール関連問題を中心に精神科の視点や支援方法を学ばせていただいています。内科病院である当院にとって、精神科の専門的な知見に触れながら日々の支援を振り返ることのできる大変貴重な機会となっておりいわくら病院との連携は欠かせないものとなっています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。





京都民医連太子道診療所 医療ソーシャルワーカー

「連携」の大切さや「治療・支援の継続性」は医療・福祉の現場でよく言われることですが、中身の伴った「連携」を行うことは容易でないと感じることが多いです。これまで、アルコールの問題を抱えておられる患者さんが身体的な課題を抱えつつも病気と向き合おうとされても、色々な状況から上手く治療に結びつかない、続かないそんな場面を何度も経験しました。でも、この連携会議の「場」を通じて、様々な機能を持つ病院・診療所・職種が参加することで、それぞれの病院の機能や専門職としての意識などを治療や支援の中身を通じて知ることで改めて疾患を理解すること、患者さん・ご家族を中心にその方のくらしを理解することがいかに大切か、参加されている専門職の関わりから患者さんやご家族と一緒に考える専門職の姿勢も重要であることに気づかされました。同じような課題を感じている支援者・関係者が、「場・空気感」を共有することから中身も伴った「連携」が生まれるそんなことを感じさせてくれる機会になっています。

西陣病院 医療ソーシャルワーカー

2022年9月から「お酒の困りごとチーム」に参加させていただいてます。画面越しながら先生方のお顔が見え、治療の様子や、一般病院へのご意見を伺える貴重な機会です。患者さんを目の前に、どんなタイミングでどう繋ぐか具体的に考えたり、「ちょっと先生と相談してもらえますか？」と気軽に打診できる距離になりました。今後も会議が会議で終わらず、一人ひとりの患者さんにとって意味のある連携・共同支援に深めていけるよう参加させていただきます。



京都南病院 医療ソーシャルワーカー

医療ソーシャルワーカーとして「お酒の困りごとチーム」に参加しています。いわくら病院の皆様をはじめ参加医療機関の皆様による心強い助言や他院の取り組みや支援を学ぶ、大変貴重な機会となっています。ここで得た知見を自院での実践に活かすとともに、より良い支援を模索する中で、参加医療機関の皆様に温かく支えていただけることに深く感謝しております。今後も連携を深めながら、相談支援に尽力していきたいと思います。

病棟での関わり紹介

初めて入院される患者様の多くは、「なぜ自分が入院しないといけないのか」「本当に良くなるのだろうか」と、不安や戸惑いを抱えて来られます。今回は、実際によくいただく質問を通して、病棟での生活や治療についてご紹介します。



Q&A

01 入院したらまずはどんなことをしますか？

入院後３～４日ほどは、安全にお酒を抜くため病棟内でゆっくり過ごしていただきます。アルコール依存症治療の第一歩は、身体から安全にアルコールを抜くことです。その過程で離脱症状が現れることがあるため、スタッフが症状の有無や程度を丁寧に観察しながら支援させていただいています。

02 入院中の過ごし方について教えてください。

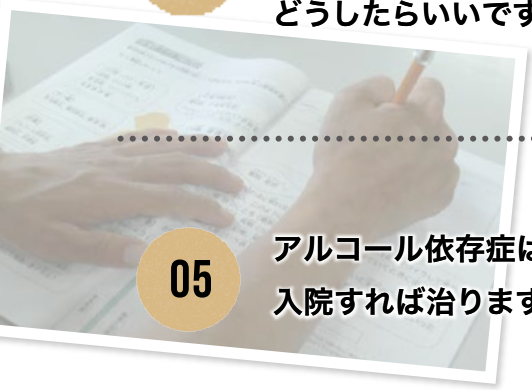
午前中は作業療法を行い、退院後の生活を見据えた心身機能の維持向上を図っています。晴れた日には散歩に出かける方もおられます。午後は治療プログラムに参加し、病気について学んだり、自身の体験を振り返ったりします。夜には院外の自助グループへ参加し、回復を続けている方々の体験談を聞いたり、自分の思いを語ったりする時間もございます。

03 ARP(アルコール・リハビリテーション・プログラム)について教えてください。

ARPは、13時30分～15時30分に行っています。内容は、医師による勉強会、テーマミーティング、栄養教室、回復されている方との交流など、多岐にわたります。多職種が連携しながら患者様の回復を支援させていただいています。

04 入院中にお酒が飲みたくなったらどうしたらいいですか？

お酒をやめてから１～２週間頃は、飲酒欲求が強くなりやすい時期と言われています。そのため、イライラしやすくなったり、不安定な気持ちになる方もおられます。「退院したい」と思われる方も少なくありません。そんな時は、一人で抱え込まず、ぜひスタッフに気持ちを伝えてください。飲みたい気持ちを否定するのではなく、「どうすれば飲まずに乗り越えられるか」を一緒に考えさせていただきます。



05 アルコール依存症は入院すれば治りますか？

アルコール依存症は「完治」ではなく、「回復していく病気」と言われています。そのため、最初は戸惑われる患者様やご家族もおられます。しかし、お酒をやめ続けることで、身体や心の状態は確実に回復していきます。一方で、再飲酒をすると再び飲酒をコントロールできなくなる特徴もございます。そのため、退院後も自助グループや通院を続けながら、回復を積み重ねていくことが大切になります。

「家族支援」について

第2・第4土曜日10:00～11:30に家族教室を実施しています。テキストを用いて全6回のテーマを看護師と精神保健福祉士が担当し、依存症という病気の理解や対応方法などを説明しています。また、対応に疲弊されているご家族が安心して気持ちを吐き出せる場としても活用いただいています。その他、ご家族のみの面談や、電話相談も随時対応しています。かかわりの中で、ご家族の回復や変化を目の当たりにすることも多く、それがまた私たち支援者の喜びと原動力になっています。



表紙・冊子内の掲載作品について　当院の「ココル」の利用者の方が作成されたものです。

場あ 第11号
2026年10月1日発行 発行人 いわくら病院 広報委員会
医療法人稲門会 いわくら病院
〒606-0017 京都市左京区岩倉上蔵町101
☎ 075-711-2171 Fax 075-722-7898 toumonkai-iwakura.com

着任医師紹介

和田 良久

今年4月より着任いたしました和田良久と申します。これまで大学病院や舞鶴医療センターに勤務し、10年前から広島にて精神分析の研鑽を積んでまいりました。このたび10年ぶりに京都に戻り、新たな環境の下で日々学びながら診療にあたっております。まだ不慣れな点はございますが、当院の精神科医療に少しでも貢献できるように努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

山口 智美

慢性期病棟を担当しています山口と申します。私は滋賀医科大学を卒業後、松下記念病院、京都大学医学部附属病院での勤務を経て、当院に着任しちょうど10年となります。皆様方の温かいご指導のもと、急性期病棟から慢性期病棟まで様々な病棟を担当させていただきました。しばらくの期間を経てこのたび再び勤務させていただくことになりました。周囲との連携を大切にしながら尽力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

いわくらオープンフェスタ

開催決定！

11月21日(土)

今年のテーマは「出逢おう。学ぼう。つながろう」



当日は、日頃のケアや研究を伝える学術発表、感動を共有する映画上映、個性豊かな作品展示や販売のほか、人気のキッチンカーや楽しい催し物など、多彩な企画をご用意しています。

精神医療を身近に学びながら、地域のみなさまと温かくつながるアットホームな一日です。ぜひお気軽にお立ち寄りください！スタッフ一同、心よりお待ちしております。







就労継続支援 B 型施設

ココル 開設！

1996年5月に開設されました「デイケアたいよう」は30年の歴史に幕を下ろし、2026年6月より「ココル」（就労継続支援B型施設）に移行いたしました。「デイケアたいよう」を大切な居場所として利用してくださっていた皆様が、これからも“安心できる居場所”として利用していただけるような施設で在り続けたいと考えています。一人ひとりの心に寄り添いながら、それぞれが望む生活の実現に向かって、精一杯の支援をさせていただきます。ココルをどうぞよろしくお願いいたします。





ココル 就労継続支援B型施設

電　話：075-711-2215(直通)

メール：cocor@toumonkai.net

COCOR2026TOUMONKAI